

《特別寄稿》

## 私の読書術

益川 敏英



私の生家は生菓材料としての砂糖を商っていた。当時キューバ糖は麻の袋に 100kg 詰められていた。この袋が廃棄物として溜る。これはゴミとして廃棄されるのであるが、これは丈夫な麻布なので然るべき所に持って行けば良い値段で買ってくれる。この様なわけで私は友人に比べ小遣い銭には困らなかった。

私の高校・大学の学生時代は戦後から既に 10 数年経過していたが、書物はまだ十分供給されておらず、戦前の物に依存する所が多かった。そこで古本屋巡りである。毎週土曜日の午後は古本屋街を徘徊していた。

この時期の思い出に次の話が有る。何時もの様に本屋巡りをしていたら、共立出版の現代数学講座全巻が揃いで出ていたのである。古本屋巡りをしたことの有る人ならご存知と思うが、揃いのデモノは紐で結わえて有り、何何揃いと手書きの紙が貼ってある。それを見ると価格は小遣い銭で買えるには少々距離が有った。今であったら、古本屋の親父に声を掛けて、今持ち合わせが無い、必ず来るから取っておいてくれ、と声を掛けて内金でも少し置いておけば済むことである。その知恵が当時はまだ無かった。だからお金が溜るまで、毎週見に行き、まだ有ると胸をなで降ろしていた。

昔は本を作る時、鉛 (※1) を拾い、木枠に詰めページを構成したが、今日の本の出版状況は昔と違い大変電子化されていて、本屋は書き手を探し、書かせて売ること、”作る”が無くなった。私の少ない経験でも、著者が数式処理の出来る、emacs (※2) + TeX (※3) で作文、そして電子媒体化し、tgif (※4) で表や図までも張り込んだものを作成して、E-Mail で本屋に送った。

本屋は表紙等体裁を整えるのみである。索引等も組版ソフト TeX の仕事である。最も TeX を作成した Donald Knuth (※5) は自分の書いた本が何回本屋に注意しても自分の思うように仕上がって来ないことに業を煮やして、組版・印刷ソフトを作ったと言われている程に完成度は高く、自分の好きな文字体を作成するためのプログラムまで有る。本屋は手配師である。本当は流通に結構経費がかかる。在庫を抱え込むことも本屋としては結構スペースと資本が要る。だから今日では配本から絶版までが短い。

だから私は今読む気が無くても、買っておかないと大変だ、絶版になる、とせっせと買い込んでいる。今は学生の頃と違い、親が麻袋を小遣いとしてくれるわけではないが、2002年に国から文化功労者に認定され、ボーナス抜きの手研究者年俸並の年金が付いている。これは国が文化的余生を送れとの配慮と思ひ、せっせと本を買い込んでいる。

この様なわけで私の身の回りは本で溢れている。数年前に京大を退官した時も大学の自室に置いてあった本を持って帰る所が無い。当然自宅も本で溢れかえっている。そこで琵琶湖西岸の北端にマキノと言う所があるが、その雑木林に安い土地を求め、そこを書庫にしている。

もうお分かりのように、この様な本との接し方でじっくり精読が出来る分けが無い。そう、乱読タイプである。本の種類に付いても、読み方に付いてもである。

私は成人してからも、雑学的興味は無くならず、言語学、古代文明特に失われた文字、世界経済情勢・平和の観点から地域紛争、兵器学。自分の商売(物理)と関係なく数学全般。進化学、音楽学等構造の有る知識なら何にでも手を出している。

最近テレビを見ていたら、イギリスの若者が車の事故で海馬(ヒポキャンパス)を損傷し、記憶は3分位しか保持できない、と報じていた。これを聞いていて、海馬は一時記憶装置(バッカー)で、大脳が長期記憶装置かと、何となく納得して聞いていた。しかし、後になって、少し考えて見るとおかしなことに気が付いた。計算機では記憶してあるコードの意味論的解釈はそれらを使用するプログラムが知っている。だからどこに格納してあっても解釈は同じで、記憶をどこに転写しても同じ意味を保持する。人の脳は進化論的に考えれば、足から継っている神経のシグナルの入る場所に足に関わる情報が有るのではないか。意味論的解釈は、計算機と違い記憶の貯めである場所抜きに意味論は語れないのでは、とはたと思うようになった。そこで生命のことを考える時に、進化論的考察が重要であると思うようになった。今せせと、進化学の本を集めている(勉強していると言ってない)。既に答えの出ている問題であればどなたか教えて頂きたい。

私の読書法は乱読である、と言ったが、学生が勉学をして行く上で決して悪い方法ではないと思っている。友達や諸先輩から、高校の物理と違い、大学の物理は、相対論は、量子力学は、固体電子論は、全然違い論理的であり目撃立ちがはっきりしている。凄い。と聞くと、自分も早く触れてみたい、早く知りたいと恋人を思うがごとく、恋い焦がれている。その勢いで取り付けてみるのである。当然読んで分かる分けが無い。それで良いのである。その時の何かが残っている。その様なことを繰り返していると、もう一度前の本に戻ってみると、前に理解が出来なかった箇所でも前に進む手がかりが出来ているのである。理解できているとは言わないが、そこに書いてある事柄を理解し、周辺の事柄を分析する準備が出来ているのである。知識の厚みが増しそこに書いてある内容を咀嚼する準備が出来ているのである。この意味で似たものを合わせ読むことも意味がある。オオバラップした所を媒介項として他の部分の理解が進むのである。

もう一つ私が勧めていることは、読書感想を友達と語り合うことである。そうすると人は自分といか

に違った読み方をしているかに気づく。その様なことが書いてあったか、と驚かされる。それらをベースに夜を徹して語り明かすのも楽しいことである。

これは弁証法的に言えば、個々人の経験が違っており、人々は自分の経験知識をベースに物事を理解して行くからである。友人と議論するということは友人の経験体験も自家菜籠中の物にすることになる。

もう一つ付け加えれば、その知識を抽象化して見るのである。世に言われることと少々違うが、私はこれをアブストラクションの方法と呼び、重要視している。抽象化する時に、不用意な仕方をする、変てこな夾雑物が紛れ込む。この思考によって言語感覚が鍛えられる。そして抽象化により適用範囲が増大し、忘れていたケースに気づく。

これは私の師坂田博士(※6)がゲルマン(※7)のクォークの提唱9年まえに、その先駆けとなる「坂田模型」に到達しておきながら、半分の成功に甘んじなければならなかった理由を分析した経験から得たものである。

これは研究方法論と呼ばれている議論であるが、素朴に言って友と夜を徹して語り明かすことが出来るのは若者の時にのみ許された特権であり楽しみである。しかし、この時出来た友情は永遠に続く。

(ますかわ としひで 理学部教員)

---

#### 編集部注

- ※1 ここでは鉛合金製の「活字」を意味する。
- ※2 「イーマックス」と読む。テキストエディタの一種で、UNIXでよく利用される。
- ※3 「テフ」または「テック」と読む。電子組版ソフトウェア。
- ※4 「ティージフ」と読む。ドローイングツール。
- ※5 ドナルド・アーヴィン・クヌース (Donald Ervin Knuth, アメリカ, 1938年1月10日～) コンピュータ科学者。1996年、第12回京都賞(先端技術部門情報科学)を受賞。
- ※6 坂田昌一(1911年～1970年)物理学者。
- ※7 マレー・ゲルマン(Murray Gell-Mann, アメリカ, 1929年9月15日～)物理学者。1969年、ノーベル物理学賞を受賞。